日本カトリック司教協議会聖書・教理部門　**聖書週間公開講演会**　大阪高松カテドラル **2026年11月23日**(月) 13:00-16:00［阿部講演は14:40-15:55 (60分、15分)］

# ■「共同体で聖書を読む」　阿部仲麻呂 (日本カトリック神学院教授、日本カトリック司教協議会聖書・教理部門委員)

## 講演の導入

## Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか

1. 聖書そのものが「共同体の書」であるから
2. 聖書は「教会の書」であるから
3. 個人の読みには限界があるから

## Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたのか

1. 初代教会：聖書は「朗読されるもの」
2. 修道院：聖書を中心とした共同生活
3. 中世：聖書は典礼のなかで読まれる
4. 近代以降：個人的な読書の広がりと共同体としての読書の再発見

## Ⅲ．共同体で聖書を読むことの霊的かつ教会的な意味

1. 神の言葉は共同体を創る
2. 聖書は共同体の一致を育てる
3. 聖書は共同体の歩みを照らす

## Ⅳ．現代の教会における具体的な実践方法

1. 霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）を共同体で行う
2. 主日の朗読箇所を分かち合う
3. 小教区・地区での聖書集会
4. 若者・家庭・高齢者向けの聖書読書会
5. 典礼のなかでの聖書の位置づけを深める

## 講演の結び　［＋感想意見 15 分］

**講演の導入**

皆様、本日は「共同体で聖書を読む」という主題でともに考える機会をいただき、心より感謝申し上げます。私たちキリスト者は、日々の祈りや黙想のなかで聖書を読みます。つまり、教会の歴史を振り返ると、聖書は常に「共同体のなかで」読まれ、理解され、分かち合われてきたことが明らかです。

聖書は「個人的な霊的読書」で終わるものではありません。むしろ**聖書は、共同体のなかでこそ、その本来の力を発揮します。**これは初代教会から現代まで一貫する事実です。

本日の講演では、**「Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか」、「Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたのか」、「Ⅲ．共同体で読むことの霊的かつ教会的な意味」、「Ⅳ．現代の教会における具体的な実践方法」**という、これら四つの柱を中心にしてお話しします。

## Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか

### 1. 聖書そのものが「共同体の書」であるから

聖書は、個人の霊的経験を記録した書物ではありません。むしろイスラエルの民、初代教会、使徒たち、という具合に、常に共同体の祈りと経験とが積み重なって形成された書物です。その際、⑴旧約は「神の民の歴史」を描き、⑵新約は「キリストを中心とした共同体の誕生と宣教」を記録しています。つまり、聖書はもともと共同体のなかで生まれ、共同体のなかで一緒に読まれることを前提として編集されているのです。

### 2. 聖書は「教会の書」であるから

第二バチカン公会議『啓示憲章』は次のように述べています。「聖書の解釈のしかたに関するあらゆることがらは最終的には教会の判断のもとにあり、教会こそが神のことばを保ち解釈する権限と任務を神から受けて行使するからである」(『神の啓示に関する教義憲章』12項［註 26；第一バチカン公会議『カトリック信仰に関する教義憲章 Dei Filius』第 2 章参照］)。これは非常に重要な原則です。聖書は、それぞれの個人が勝手に解釈してよい書物ではなく、むしろ**教会共同体における信仰生活の立場で一緒に読むべき書物**なのです。

### 3. 個人の読みには限界があるから

個人で聖書を読むと、自分の経験や価値観や感情に引き寄せてしまいがちになります。しかし聖書を共同体で一緒に読むと、他者の視点、教会の伝統、典礼の流れ、共同体の祈りが加わり、聖書の意味がよりいっそう豊かに理解できるようになり、心が開かれます。

## Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたか

### 1. 初代教会：聖書は「朗読されるもの」

初代教会では、聖書は個人が所有するものではなく、共同体の集まりで朗読されるものでした。つまり「家庭教会での朗読」、「使徒の手紙の回覧」、「共同体での解釈と分かち合い」が積み重ねられました。聖書の内容は共同体の場で朗読されることで、「一緒に聞くもの」であり、「一緒に受け取るもの」でした。

### 2. 修道院：聖書を中心とした共同生活

4 世紀から今日に至るまでのあらゆる修道院では、聖書朗読は共同体の中心的な営みです。「共同体での聖務日課」、「霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）」、「共同体での黙想と分かち合い」が深められました。修道者たちは、聖書を通して共同体の一致を深め、神のことばを意識して受け容れて愛の実践を積み重ねて生きる生活を築きました。

### 3. 中世：聖書は典礼のなかで読まれる

特に修道生活の伝統を大切にした中世の教会では、聖書は典礼のなかで体系的に読まれました。ミサと聖務日課は、共同体が聖書朗読を聞いて人生の指針を受け取る場でした。

### 4. 近代以降：個人的な読書の広がりと共同体としての読書の再発見

近世 16 世紀の活版印刷技術の発展により、個人で聖書を読むことが可能になりました。しかも各国語で聖書が翻訳されたので、近代 17 世紀ごろから各自が聖書を手にして個人的な読書をすることが広がりました。特にルターによるドイツ語訳聖書が大量に印刷されて庶民層にも安い値段で幅広く流通しました。しかし、第二バチカン公会議以降、教会は「共同体で聖書を読む」ことの重要性を再び強調しています。

## Ⅲ．共同体で聖書を読むことの霊的かつ教会的な意味（15 分）

### 1. 神のことばは共同体を形づくる

聖書は共同体を生み、共同体を養い、共同体を導きます。こうして、「イスラエルの民は

『神のことば（モーセ五書）』によって形成された」のであり、「初代教会は『使徒の教え（使徒言行録）』によって一致した」のであり、「現代の教会も『神のことば』によって歩む」のです。共同体で聖書を読むことは、教会の自分たちらしさ（アイデンティティ）を確認する行為です。

**2. 聖書は共同体の一致を育てる**

共同体で聖書を読むと、たがいの信仰経験が共有され、理解が深まり、共同体の絆が強まります。「同じ言葉を聞き」、「同じ祈りを捧げ」、「同じ希望をいだくことになる」からです。聖書は共同体の一致の源なのです。

**3. 聖書は共同体の歩みを照らす**

共同体は常に課題や困難を抱えています。そのとき、聖書は共同体の歩みを照らし、方向性を示します。「使徒言行録は『共同体の危機』をどのようにして乗り越えたかを示し」、「預言者たちの呼びかけは『共同体の罪』を指摘するとともに回心へと導き」、「福音書は『共同体の中心がキリストである』ことを教えるのです。共同体で聖書を読むことは、共同体の未来を識別（discern）する営みです。

## Ⅳ. 現代の教会における具体的な実践方法

ここからは、現代の教会で実際に取り組むことができる方法を具体的に示します。

**1. 霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）を共同体で行う**

霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）は、**「⑴読む（Lectio）」、「⑵黙想する（Meditatio）」、「⑶祈る（Oratio）」、「⑷観想する（Contemplatio）」**という四つのステップで神のことばを味わう方法です。共同体で行うと、おたがいが気づいたことが共有され、神のことばがより豊かに響きます。

**2. 主日の朗読箇所を分かち合う**

主日の朗読箇所を中心に**「⑴感じたこと」、「⑵気づいたこと」、「⑶心に響いた言葉」、「⑷共同体としての課題との関連」**を分かち合うことは、共同体の信仰を深める非常に良い方法です。

**3. 小教区・地区での聖書集会**

小教区の中で、少人数のグループが定期的に集まり、聖書を共同体で読むことは、共同

体の活性化に大きく寄与します。

**4. 若者・家庭・高齢者向けの聖書読書会**

共同体の多様性に応じた読書会を設けることで、聖書を共同体で読むことの実りがより広く受け取られるようになります。

**5. 典礼のなかでの聖書の位置づけを深める**

ミサの朗読は、共同体が神のことばを受け取る最も重要な場です。**「⑴朗読奉仕者の養成」、「⑵朗読の質の向上」、「⑶沈黙の時間の確保」**などが大切です。

**講演の結び**

聖書は、私たち一人ひとりに語りかけると同時に、共同体全体にも語りかけています。共同体で聖書を読むことは、教会の伝統に根ざし、現代の教会においても不可欠な営みです。**神のことばは「⑴共同体を形づくり」、「⑵共同体を一致へ導き」、「⑶共同体の歩みを照らし」、「⑷共同体を未来へ送り出す」もの**です。こうして、私たちが共同体で聖書を読むとき、教会は本来の姿を取り戻し、神のことばによって生きる共同体となります。

今日の講演が、皆さまの共同体における聖書の読み方を深める一助となれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

---

**■付録 1. 聖書を「共同体として読むこと」についての質疑応答集**

**① 個人で聖書を読むことと、共同体で読むことの違いは何ですか？**

**回答：** 個人で聖書を読むことは、神との一対一の対話として非常に大切です。しかし共同体で聖書を読むと、「⑴他者の視点」が加わり、「⑵教会の伝統」のなかでともに生きることができるようになり、「⑶典礼の流れ」を自覚し、さらに「⑷共同体の経験」が加わるので、聖書の意味がより豊かに開かれて深まります。聖書はもともと共同体のなかで生まれ、共同体に向けて書かれた書物です。そのため、共同体で読むと「本来の響き」を取り戻せるようになります。

**② 共同体で聖書を読むとき、意見が対立したらどうすればよいですか？**

**回答：** 対立はむしろ健全なプロセスです。聖書は一つの答えだけを示すのではなく、共同体が対話しながら「識別」することを促します。大切なのは、**「⑴相手の意見を否定しな**

**い」、「⑵自分の経験だけに閉じこもらない」、「⑶教会の教えと伝統を基準にする」、「⑷祈りの心を保つ」**という努力です。共同体で聖書を読む目的は、**神のことばが共同体に何を求めているのかを仲間といっしょに協力して探るため**です。

**③「霊的読書」（レクティオ・ディヴィナ）をグループで行うときの注意点はありますか？**

**回答：** あります。特に以下の点が重要です。**「⑴黙想の時間を十分に取ること」、「⑵分かち合いが『説教』にならないようにすること」、「⑶個人の経験を強制しないこと」、「⑷沈黙を恐れないこと」、「⑸司祭や指導者が結論を急がせないこと」。**レクティオ・ディヴィナは「答えを出す場」ではなく、**神のことばが心に響く瞬間を共同体で共有する場**です。

**④ 聖書を読むことに慣れていない信徒にも参加してもらうにはどうすればよいですか？**

**回答：** ハードルを下げる工夫が有効です。たとえば、**「⑴短い箇所から始める」、「⑵質問を一つだけに絞る」、「⑶『感じたこと』を中心にして分かち合う」、「⑷知識よりも『心に響いた言葉』を大切にする」、「⑸典礼の朗読箇所を使う（親しみやすい）」**ことが大事です。何よりも「聖書を知らないと参加できない」という雰囲気をなくすことが大切です。聖書は知的な教科書ではなく、**神が語りかける愛のことば**だからです。

**⑤ 共同体で聖書を読むと、誤った解釈が広まる危険はありませんか？**

**回答：** 確かに危険はあります。しかし、教会はそのために「解釈の基準」を与えています。**「⑴教会の教え（カテキズム）」、「⑵典礼の流れ」、「⑶教父たちの解釈」、「⑷司祭や指導者の役割」**。共同体で読むときは、これらの基準を踏まえることで、誤解を防ぎつつ、豊かな読みが可能になります。

**⑥ 若者や子ども向けに聖書を読むとき、どのような工夫が必要ですか？**

**回答：** 若者や子どもは「物語」・「経験」・「感情」に強く反応します。それゆえ、**「⑴物語性のある箇所を選ぶ」、「⑵具体的な場面を想像させる」、「⑶グループワークを取り入れる」、「⑷質問を単純にする」、「⑸『自分だったらどう感じる？』と問いかける」**工夫が必要となります。聖書は若者にとっても非常に魅力的な書物です。それゆえ、彼らが「自分の物語」として受け取れるように導くことが鍵です。

**⑦ 高齢者の多い共同体では、どのような聖書の読み方が適していますか？**

**回答：** 高齢者は人生経験が豊かで、聖書の言葉が深く響きます。それゆえ、**「⑴長い沈黙を大切にする」、「⑵ゆっくり朗読する」、「⑶思い出や人生経験を分かち合う」、「⑷慰めと希望の言葉を中心にする」、「⑸詩篇や福音書を多く使う」**ことが大事です。高齢者の信

仰経験は共同体の宝です。聖書を共同体で読むことを通して年長者の智慧が参加者全員に共有されます。

**⑧ 共同体で聖書を読むことは、教会の一致にどのように役立ちますか？**

**回答：** 共同体で聖書を読むと、**「⑴同じ言葉を聞き」、「⑵同じ祈りを捧げ」、「⑶同じ希望をいだき」、「⑷同じキリストを中心に据える」**という経験が生まれます。これは一致の基盤です。一致は「意見の一致」ではなく、**キリストの呼びかけをともに聞くことによって生まれる霊的な連帯**です。

**⑨ 聖書を読む会が「勉強会」になってしまうのですが、どう改善できますか？**

**回答：** 「知識中心」から「経験中心」へ移行することがポイントです。それゆえ、**「⑴解説を短くする」、「⑵分かち合いの時間を増やす」、「⑶『心に響いた言葉』を最初に聞く」、「⑷祈りで始め、祈りで終える」、「⑸沈黙を取り入れる」**ことが大事です。聖書は学問の対象ではなく、**神が語りかける生きた愛のことば**です。その経験を中心に据えることで、勉強会から祈りの場へと変わります。

**⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教にも役立ちますか？**

**回答：** 大いに役立ちます。共同体が聖書を通して生き生きとした信仰を育むと、**「⑴言葉の一致」、「⑵祈りの一致」、「⑶方向性の一致」**が生まれ、共同体全体が**「福音をあかしする場」**となるからです。宣教は「型にはまった計画案（プログラム）」などではなく、むしろ**「共同体の生命力から自然に生まれるもの」**です。聖書はその生命力の源です。

## ■付録 2. 青少年向け質疑応答集

**① 聖書って難しそうですが、若い人でも読めますか？**

**回答：** もちろん読めます。聖書は「難しい本」ではなく、**人の心に語りかける物語**です。聖書には「⑴友情」、「⑵裏切り」、「⑶勇気」、「⑷不安」、「⑸希望」、「⑹家族」、「⑺夢」、「⑻挫折」が描かれるからです。若者が感じることは、聖書のなかに全部含まれていますのでヒントになります。むしろ若い時期こそ聖書の言葉が強く響くことが多いです。

**② 共同体で聖書を読むと、何がいいの？**

**回答：** 一番の善さは、**自分だけでは気づけないことに気づけること**です。たとえば、**「⑴他の人の感じたこと」、「⑵違う視点」、「⑶経験の共有」、「⑷励まし」、「⑸新しい発**

**見」**などが私たちの心を、開かれた交流的な寛大さへと成長させます。聖書は「独りで読む本」ではなく、**みんなで読むともっと面白くなる本**です。

**③ 聖書を読んでも、正直よくわからない時がありますが、どうしたらいいですか？**

**回答：** わからなくて大丈夫です。聖書は「わからないところがあって当たり前」の本です。大切なのは、次のことです。**「⑴わからないままでも読んでみる」、「⑵心に残った言葉を大切にする」、「⑶みんなで話してみる」、「⑷祈りながら読む」**。理解しようとするよりも、まず**心に響く瞬間**を大切にしてください。そして、経験を重ねると急に意味がわかるときが訪れます。考えつづけて味わうことそのものが心を鍛え上げることになります。

**④ どの部分から読めばいいのでしょうか？**

**回答：** 若い人におすすめなのは、次の箇所です。

**⑴福音書（マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ）** → イエスの生き方がわかります

**⑵詩篇** → 感情がそのまま祈りになっています

**⑶使徒言行録** → 若い弟子たちが世界に飛び出す冒険物語が魅力的です

**⑷創世記の物語部分** → 家族・夢・失敗・希望が詰まっています

まず、「読みやすいところから読み始める」のが一番大事なことです。

**⑤ 聖書を読むとき、質問してもいいのでしょうか？疑ってもいいのでしょうか？**

**回答：** もちろんです。質問や疑問は、**信仰の成長のスタートライン**です。聖書の人物たちも、**「⑴迷い」、「⑵疑い」、「⑶不安」、「⑷神への質問」**をたくさん積み重ねています。質問することは、神から遠ざかることではなく、**神に近づくための大切なステップ**です。

**⑥ 友達と聖書を読むとき、何を話せばいいのでしょうか？**

**回答：** 難しいことを話す必要はありません。次の三つだけで十分です。**「⑴心に残った言葉」、「⑵気になったこと」、「⑶自分の生活とのつながり」。**「正しい答え」を探す必要はありません。**感じたことをそのまま話すだけで、聖書の理解は深くなります。**

**⑦ 聖書を読むと、人生が変わるって本当なのですか？**

**回答：** 本当です。でも「劇的に変わる」というより、**少しずつ、静かに、確実に変わる**ことが多いです。たとえば以下の学びが実現できます。**「⑴自分を大切にできる」、「⑵他人を尊重できる」、「⑶迷ったときに道が見える」、「⑷希望を失わなくなる」、「⑸自分の価値**

**に気づく」**。聖書は、人生の「羅針盤（コンパス）」になります。

**⑧ 教会にあまり来ていない友達にも、聖書をすすめてもいいのでしょうか？**

**回答：** すすめても大丈夫です。ただし、押しつけないことが大切です。「この言葉、なんか良かったよ」、「この話、ちょっと面白いよ」、「一緒に読んでみない？」という気楽な呼びかけをつづけることが大事です。聖書は、信者だけの本ではありません。**すべての人に開かれた呼びかけ**です。

**⑨ スマホで聖書を読んでもいいのでしょうか？**

**回答：** もちろん OK です。若い人にとってスマホは自然なツールです。大切なのは、**どこで読むかではなく、どう受け取るか**です。アプリで読んでも、紙で読んでも、神のことばは同じように心に届きます。

**⑩ 聖書を読むとき、神が本当に語っているのはどのようにしてわかるのでしょうか？**

**回答：** 「心が動く瞬間」がそのサインです。**「⑴なぜか気になる言葉」、「⑵何度も思い出す言葉」、「⑶背中を押されるような感覚」、「⑷慰められる瞬間」、「⑸何かが変わる予感」**。それらのしるしによって、神があなたに語っている可能性が見えてきます。神の声は、**大きな音ではなく、静かな響きとして届く**ことが多いです。

## ■3. 司祭、修道者向けの質疑応答集

**① 「聖書は教会の書である」という主張は、聖書の霊感とどのように関係しますか？**

**回答：** 聖書の霊感（Inspiratio）は、神が人間の著者を通して語られたという事実を示します。しかし、教会はその霊感を受けた書物を「自らの信仰にもとづいて」受け取り、典礼・教義・生活のなかで解釈してきました。第二バチカン公会議『啓示憲章』は、**「⑴聖書は教会にゆだねられた」**ものであり、**「⑵教会の生きた伝統のなかで解釈される」**と明言します。つまり霊感は「神のことばが教会に託された」という事実を示しており、**教会性（Ecclesialitas）は、その言葉が正しく理解される場を保証する**という関係にあります。霊感は神のことばの起源を、教会性は解釈の場を示すものとして理解することができます。

**② 共同体で聖書を読むことは、教会の「聖伝（Traditio）」とどのように関係しますか？**

**回答： 聖伝は、「⑴使徒たちの宣教」、「⑵初代教会の信仰告白」、「⑶典礼の実践」、「⑷教父たちの解釈」、「⑸教会の継続的な信仰生活」を通して受け継がれてきた「生きた伝**

**統」です。**共同体で聖書を読むことは、**聖伝の流れのなかで神のことばを再び受け取る行為**です。聖書は聖伝の中心にあり、聖伝は聖書の正しい読み方を保証します。共同体で読むことは、聖伝のなかで聖書を「生きた言葉」として受け取る最も基本的な営みです。

**③ 聖書学的な研究（歴史批評など）と共同体での霊的読書は、どのように統合できますか？**

**回答：** 両者は対立するものではなく、たがいに補完し合います。**「⑴聖書学的研究」**は、①著者の意図、②文脈、③歴史的背景、④文学的構造を明らかにし、テクストの「客観的意味」を探ります。一方、**「⑵霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）」**は、①神が今の共同体に何を語るか、②霊的な響き、③祈りのなかでの受け取り、を重視します。

教会は、「⑴聖書学的研究」と「⑵霊的読書」の両者を統合するために、**「文字どおりの意味（sensus litteralis）」を基礎としつつも「霊的な意味（sensus spiritualis）」へと開かれる**という聖書の読み方の伝統的な枠組みを保持しています。こうして、歴史批評は聖書を読むための「土台」であり、霊的読書は「建物」と言えるでしょう。

**④ 共同体で聖書を読む際、教会の「教導職（マジステリウム）」はどのような役割を果たしますか？**

**回答：** 教導職は、**「⑴聖書の正しい解釈を保証し」、「⑵誤った解釈から共同体を守り」、「⑶信仰の一致を保つ役割を担います」**。共同体で聖書を読む際に、**「⑴カテキズム」、「⑵公会議文書」、「⑶教皇文書」、「⑷典礼の構造」**が、解釈のための「基準点」となります。教導職は、共同体での聖書の読書を制限するのではなく、むしろ**共同体が神のことばを豊かに受け取るための「安全な枠組み」を提供する**役割を果たします。

**⑤ 初代教会の「聖書朗読の共同体性」は、現代の小教区にどのように応用できますか？**

**回答：** 初代教会では、聖書は「朗読されるもの」であり、共同体が「朗読を聞く」ことでメッセージが心のなかに受け取られました。現代の小教区でも以下の形で応用できます。**「⑴主日の朗読を中心にした分かち合い」、「⑵家庭での小さな朗読会」、「⑶地区ごとの聖書の集い」、「⑷朗読奉仕者の養成」、「⑸朗読後の沈黙の導入」、「⑹聖務日課の共同唱和」**。初代教会の原則は、**「聖書は共同体のなかで響く言葉である」**という点にあります。現代でも、朗読を中心とした共同体的な聖書の受容は非常に有効です。

**⑥ 共同体で聖書を読むことは、教会の「識別（discernment）」とどのように関係しますか？**

**回答：** 識別は、**「⑴神の導き」、「⑵共同体の課題」、「⑶霊の動き」**を見極める営みです。共同体で聖書を読むと、**「⑴神の言葉が共同体の現状に光を当て」、「⑵方向性を示し」。「⑶課題を明らかにし」、「⑷回心へと導きます」**。たとえば使徒言行録は、共同体が

危機のなかで「聖書と祈り」を通して識別した例を多数示しています。共同体で聖書を読むことは、**識別の霊的プロセスの中心的要素**であると言えます。

**⑦ 典礼のなかでの聖書朗読と、共同体での聖書集会とはどのように区別されますか？**

**回答：** 典礼のなかでの聖書朗読は、**「⑴教会の公的祈り」、「⑵神のことばへの『奉仕』」、「⑶共同体への宣言」であり、聖書の内容が「教会の声」として響く場**です。

一方、聖書の集いは、**「⑴共同体の学び」、「⑵分かち合い」、「⑶霊的成長」**を目的とし、聖書の内容が「共同体の生活のなかで」受け取られる場です。それゆえ、典礼は「宣言」であり、聖書集会は「受容」であると言えます。両者はたがいに補い合い、共同体の信仰を深めます。

**⑧ 聖書を共同体で読むことは、エキュメニカルな対話にどのように寄与しますか？**

**回答：** 聖書はすべてのキリスト者に共通する基盤です。共同体で聖書を読むことは、以下の点でエキュメニカルな（諸教会一致推進的な）対話を促進します。次のとおりです。**「⑴共通のテクストを共有する」、「⑵同じキリストを中心に据える」、「⑶祈りを通して一致を経験する」、「⑷解釈の違いを対話的に理解する」**。教会は、聖書を中心とした対話が一致への道であることを繰り返し強調しています。共同体で聖書を読むことは、**一致の霊的基盤を育てる行為**です。

**⑨ 聖書を共同体で読む際、教父の解釈はどのように活用できますか？**

**回答：** 教父（古代の聖なる司教たち）の解釈は、**「⑴初代教会の信仰」、「⑵典礼の実践」、「⑶霊的読書」**の伝統を反映しており、共同体で聖書を読む際の重要な資源です。

今日、教父の解釈を活用する方法としては、**「⑴説教の準備」、「⑵聖書集会の補助資料」、「⑶霊的読書の深まり」、「⑷典礼の理解」**などが挙げられます。教父の解釈は、現代の共同体が先人たちとの結びつきを意識して「教会の連続性」を保ちながら聖書を読むための架け橋となります。

**⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教司牧（ミッション）にどのような影響を与えますか？**

**回答：** 共同体が聖書を通して活き活きとした信仰を育むと、**「⑴言葉の一致」、「⑵祈りの一致」、「⑶方向性の一致」**が生まれ、共同体全体が「福音をあかしする場」となります。宣教は机の上で作成される理論的なプログラムではなく、むしろ**神のことばによって形づくられた共同体の生命力からおのずと生まれるもの**です。聖書は宣教の源泉であり、共同体で聖書を読むことは宣教の基盤を整える営みです。